

訪問リハビリテーションに対する学生の意識調査

学籍番号04M2419 氏名 兵頭 那美

1. 研究目的

臨床実習で訪問リハビリテーション（以下訪問リハ）を見学する機会があり、その時『これから臨床で働く学生は訪問リハに対してどのような意識を持っているか?』と考えた。

本研究では、①学生は訪問リハに対しどのような意識を持っているのか? ②理学療法学生（以下PT）と作業療法学生（以下OT）の間で意識の違いはあるのか? ③臨床実習での訪問リハの経験の有無によって意識の違いはあるのか? を調査し、以下の点を検討することを目的とした。

- 1) 学生が抱く訪問リハへの意識、不安や疑問とはなにか
- 2) 学生の視点から臨床実習における訪問リハ・授業内容の重要性を考える

2. 対象と方法

1) 対象とデータ収集方法

①青森県内のPT、OT養成校のうち、臨床実習終了後の最終学年（4年生3校、3年生1校）PT：66名、OT：73名。アンケートを一斉に実施・回収。本校では直接実施し、他校では担当教員に依頼し郵送で回収。

②訪問リハ担当教員。授業背景…訪問リハに関する授業、実習、時間を調査。

2) データ解析方法

①PT・OTで集計し、各アンケート項目でグラフを作成、比較。

②PT・OTの専門性の違い、訪問リハの経験の有無によってアンケート項目に関係、相違はあるか。SPSS（ χ^2 検定）を使用し比較。

③アンケートの記述項目を分類し、学生の回答の傾向を分析。

3. 結果・考察

1) アンケート回収率（学生）：PT…（66/70）94% OT…（73/73）100%

2) 専門性の差と訪問リハ経験の影響：PTとOTの学生でアンケート回答結果に有意な差は無かった（ $P>0.05$ ）。訪問リハ経験の有無は「興味の有無」「実習の有無」「実習内容」「不安や疑問」の回答に有意な差は無かった。（ $P>0.05$ ）

3) 訪問リハ興味の有無：9割以上の学生が訪問リハに興味を持ち、その理由は「訪問リハの必要性・重要性を感じている」という回答が多かった。このことより、学生が訪問リハへ興味を持つ背景に入院日数の短縮により地域・訪問リハが重要視されているという社会的背景が考えられた。

4) 学生を取り巻く訪問リハ実習の現状：学生の6割以上が訪問リハを経験し、実習内容の9割は「見学」であった。一方、希望実習内容の半数は「自分でプログラムを立案し実行したい」と考えていた。また経験群の9割は訪問リハの経験は「よかった」と感じていた。以上より学生が訪問リハを経験する機会が多いが、学生の希望実習内容と現実にギャップが認められた。このことは「臨床実習の手引き」より『学生は限られた時間の中で利用者のニーズを把握し、対応することは困難』と考えられているためと思われる。しかし、学生の感想から訪問リハは見学のみでも有益であることが分かった。

5) 学生が抱く訪問リハの不安や疑問：訪問リハ経験群は「患者の急変に対応できるか」という回答が多く、未経験群は「知識・技術・経験が少ない」という傾向が見られた。以上より、訪問リハの経験の有無による不安や疑問の回答の有意差は無いが、経験することは、「知識・技術・経験の少なさ」に対する不安を減少させる可能性があると考えられた。

6) 授業背景調査・実習での訪問リハの有無・訪問リハ臨床実習の有無：訪問リハに関する講義は全体の69%実施されているが、見学・実習を行っている割合は14%であった。授業担当教員も授業で訪問リハを理解してもらうことに難しさを感じていた。また、学生の38%は訪問リハの授業改善を望んでおり、9割以上の学生が訪問リハを実習に含めて欲しい、どちらでもよいと答えた。理由は「実際に体験してこそ、訪問リハのイメージがつかめる」と考え、訪問リハの経験を授業で行う代わりに、臨床実習は有効に時間を活用できる機会となると考える。

4. まとめ

訪問リハに対し、PTOTの学生の意識の違いはなく、共に興味を持ち可能ならば自験例で経験したいと考えている。しかし、急変時の対応や知識・技術・経験不足に対し不安を抱いている。授業の中に訪問リハの実習を含めることは、担当教員の調査からは容易ではないことが示された。したがって、授業で補えない部分を臨床実習の中に組み込み、学生自身も積極的に訪問リハの実施を表明することで、学生の不安や疑問を軽減することになると考える。